

## ヴァイオリン協奏曲 (K.216~219) はチェルニー伯爵のために作曲された？

## 伯爵家とモーツァルト家との交流

野口秀夫

## 1. はじめに

モーツァルトは《偽の女庭師》K.196 上演のために 1774 年 12 月 6 日からミュンヘンに赴き 1775 年 3 月 7 日に帰郷、次にマンハイムに発つ 1777 年 9 月 23 日までの 2 年半をザルツブルクで過ごした。モーツァルトが不在にしていた 1775 年初めに若いヨハン・ルードルフ・チェルニー伯爵がザルツブルクでの活躍を始めていた。ヴァイオリン協奏曲連作 (K.216~219) はチェルニーのために作曲されたとする説がある<sup>注1</sup>。さて、どうであったのであろう。

## 2. チェルニー伯爵家の若者たちの登場

ザルツブルク大司教ヒェロニムス・フォン・コロレード伯爵 (1732.5.31 ヴィーン-1812.5.20 ヴィーン) の 18 人兄弟姉妹の長女マリーア・アントーニア・フォン・コロレード女伯爵 (1728.4.21 ヴィーン-1757.10.2 ベーメンのペーテルスブルク) はフデニッツ及びノイハウス帝国伯プロコプ・アーダルベルト・チェルニー (1726.2.23 プラハ-1777.1.30 プラハ) と 1746 年に結婚した。この結婚で 4 人の子に恵まれたがそのうちの 2 人マリーア・アントーニア (1750.3.26 - 1801.4.25 ヴィーン) とヤン [=ヨハン]・ルードルフ (1757.6.9 ヴィーン-1845.4.23 ヴィーン) がモーツァルトとの関係で重要である。大司教の姪に当たる姉のマリーア・アントーニアはホーエン・ザルツブルク城塞司令官ヨハン・ゴットフリート・リュッツォウ伯爵と結婚しザルツブルクに住んだ。大司教の甥に当たる弟のヨハン・ルードルフは 17 歳の 1774 年に公法と神聖ローマ帝国史を学ぶためにザルツブルクにやってきた<sup>注2</sup>。1775 年には宮廷カレンダーの「今年、当地にてしばしば学習している騎士」の欄に取り上げられている<sup>注3</sup>。1776 年 11 月 8 日にザルツブルク大学 [Paridiana] に入学しており、法律学を学び、芸術研究を行い、特に音楽と詩に興味を持って熱中した<sup>注4</sup>。

この伯爵姉弟の具体的な活動が初めて記録されるのはシーデンホーフ<sup>注3</sup>の 1775 年 1 月 11 日付け日誌であり他の貴族たちとともにヴォルテールの喜劇を演じている：「紳士淑女が演じるフランス喜劇に行った。演目はヴォルテールの《ナニーヌ、あるいは克服された偏見 (Nanine, ou La Préjugé vaincu)》であった。演者はリッツァ [=リュッツォウ] 伯爵及び伯爵夫人、チェルニー伯爵、ロードゥローン伯爵夫人旧姓アルコ、宮内大臣令嬢のロードゥローン嬢、チェルニー伯爵の執事、ジークムント [=ジークムント]・ロードゥローン伯爵、エンツェンベルク男爵であった」。

1775 年 2 月 28 日 (火) は謝肉祭の最終日であった。大司教コロレードが市民のために新しく開場した市庁舎の舞踏会場での大コントロールダンスの様子がシーデンホーフによって次のように記録されている：「夕方 6 時に仮装舞踏会 (Redoute) 〔中略〕私は 6 時前にシュタットジンドィコ氏 [=ベネディクト・フォン・レース] の所に行きそこでコントロールダンス・メンバーと待ち合わせた。メンバーは 12 ペアから成っている。1 組目はエルンスト・ロードゥローン伯爵の夫人 [=マリーア・アントーニア・フォン・ロードゥローン] と [ヨハン・ルードルフ・] チェルニー伯爵、2 組目はリッツァ [=マリーア・アントーニア・フォン・リュッツォウ] 伯爵夫人と厩舎長官フォン・クーンブルク [=レーオポルト・キューンブルク] 伯爵、3 組目はルイーゼ・ロービニ嬢と従者 (Page) の [ジギースムント・フォン・] エンツェンベルク男爵、4 組目はマイエルン [=アンナ・マイル・マイルン] 嬢と従者のトラウトマンストルフ伯爵、5 組目は [マリーア・カロリーナ・] ロードゥローン伯爵夫人と従者のシャーフマン男爵 (年長)、6 組目はフォン・フロミラー女男爵嬢と従者のシャーフマン男爵 (年少)、7 組目はトゥン伯爵嬢とジークムント・ロードゥローン伯爵、8 組目はテレゼ・バリザー嬢とライヒャルト・トゥン伯爵、9 組目はヨゼファ・バリザー嬢とフォン・ヴァルター氏、10 組目はトーネッル [=マリーア・アンナ・コンスタンティア]・バリザー嬢とシーデンホーフ、11 組目は [テレゼ・] フォン・キルジンガー嬢と副狩猟隊長 [フランツ・クリストフ・フォン・] レールバッハ男爵、12 組目は [テレジア・] フォン・バリザー嬢と [カール・ルートヴィヒ・フォン・] ペッターマン少佐 (Le Major) であった。私たちは 6 時過ぎにペアごとに舞踏会場 (Tanz Saal) に入った。そこにはヒェロニムス・フォン・コロレード閣下と舞台上に筆頭貴族、その柵の下には別の御仁がご視察のため座っておられた。このコントロールダンスは 15 分とはかからない。したがって全てが繰り返された；それは 30 のフィギュアから成り立っていた。仮装は白と青の水夫の姿であった。12 時には全て終了。12 時過ぎに私は家路に就いた。」

ここでチェルニー伯爵とリュッツォウ伯爵夫人は宮廷側の要人としてではなく、民間人の一員として参加している。メンバーはほとんどが貴族であるとは言え、これがコロレードの市民への舞踏会場提供の意図の具現なのであった。シーデンホーフはこの日に限って参加者の自分自身のことを「私」ではなく名前を書いており (10 組目を参照) この重要な日を日記としてでなく第三者に報告するかのときスタイルで記録している。

### 3. モーツァルトがミュンヘンから帰郷して後の演奏会にかかわったチェルニーたち<sup>注5</sup>

1775 年 3 月 7 日、ミュンヘンから帰郷したモーツァルトは 1777 年 9 月 23 日までザルツブルクに留まることになる。帰郷したばかりのモーツァルトは 2 幕の音楽劇《羊飼いの王》K.208 を作曲した。この曲はウィーンからイタリアへの旅行の途上であったマクシミリアン・フランツ大公<sup>注6</sup>に敬意を表し宮廷において 4 月 23 日に上演された。

大公の旅に随行していたヨハン・フランツ・ハルトエック伯爵の翌日付日誌<sup>注7</sup>には次のように書かれている：「晩には昨日同様、奏楽の楽しみが選ばれたが、しかし当晚は大司教の姪のリュッツォウ伯爵夫人が、もう一人の貴婦人とクラヴィアを弾いて聴かせてくれた。これは大公のほか、大司教、ウーガルテ伯爵、**チェルニー伯爵**、それにハルトエック伯爵が伴奏した。同時に、音楽会の最後には、有名な息子のほうのモーツァルトがクラヴィアで弾いて聴かせ、さまざまな曲を暗譜でまことに巧みに弾いたが、これまたまことに快いものであった。」

父のプロコプ・アードルベルトが夫人を伴って息子に会いにザルツブルクに到着したのは 5 月 29 日であった。ナンネルの日記帳<sup>注8</sup>に「お父上のチェルニーさんと奥様が当地に着く」と記録されている。

ルース・ハリウエル<sup>注9</sup>は「残念なことに彼が何時帰っていったかは知られていないが、訪れたときには音楽でもてなされたに違いない」と言い、以下の推測を行っている：

(1) モーツァルトのヴァイオリン協奏曲 K.211 は 1775 年 6 月 14 日の日付だがこの曲は父伯爵の出席を見込んだ演奏会のために作曲されたのだろうか。あるいは野心的なヴァイオリニストであった子伯爵ヤン・ルードルフが独奏したと仮定することは可能であろうか。

次の年 1776 年 5 月 24 日付けシーデンホーフェンの日誌によれば「マドリッド大使の奥様のロブコヴィッツ夫人（**チェルニー父伯爵の姉妹**である）がお子様たちと来られた。さらに今日はリュッツォウ伯爵夫人の姉妹であるロッテンハン伯爵の家族も来た」とあり、ハリウエルはこの情報をモーツァルトが事前に入手したと推測し以下のように述べている：

(2) チェルニー家のメンバーが大勢ザルツブルクを訪問する直前の 4 月にモーツァルトは有能なクラヴィア奏者であった彼の姉リュッツォウ伯爵夫人（当時 26 歳）のためにクラヴィア協奏曲 K.246 を書いた。

### 4. 舞踏会好きで世話焼き好きのヨハン・ルードルフ・チェルニー

シーデンホーフェンは 1776 年、1777 年の仮装舞踏会における出し物や仮装の詳細とそれら参加者のリストも提供してくれる。チェルニーやリュッツォウ伯爵夫人ばかりでなく、モーツァルト父子の参加も記録されている。

1776 年 2 月 14 日(水)には：「夕方ラッサーとゲツィンガーがさらにやってきて我が家で食事をした。その後私は〔ヨハン・フォン・〕ゲイヤーのところに行きそこで私を待っていたメンバーと合流。仮装舞踏会（auf der Redute）ではフランスの出し物が演じられた。私たちは 9 時半に入った。鼓手リーダーとしてのマイスナー氏を先頭に 6 つの役柄は以下の通り。厩舎長官（Obriststallmeister）〔レーオポルト・キュンベルク伯爵〕が伍長（Corporal）役、そして大將（General）の〔フランツ・ヨハン・ネーボムク・アントーン・フェリークス・〕アルコ伯爵、城塞大佐（Schlos Oberster）のリュッツォウ伯爵〔ヨハン・ゴットフリート・リュッツォウ伯爵〕、〔ポリカーブ・フォン・〕リリエン男爵、シュミット氏、〔フェルディナント・〕フォン・ゲイヤー・フェントリッヒ氏、そして〔アントーン・ヴィリバルト・フォン・〕ヴォルフエック伯爵が司令官（Commandirte）役。それから〔ヴォルフ・ヨーゼフ・〕イーバラッカー伯爵、大尉（Hauptmann）の〔フェリークス・ヨハン・フォン・〕フライタークと私が新兵（Recruten）役、少尉（Leutenant）のリーザーが看守（Gefangner）役、そしてヴィッカ伯爵が境界見張り人（Margetenter [=Margetender]) 役。更に〔ヨハン・ルードルフ・〕**チェルニー伯爵**は対抗宣伝（Gegenwerbung）役の騎士（Cavallerie）を。そこには〔フランツ・クリストフ・フォン・〕レールバッハ男爵、従者たち（Pagen）、その他もいた。私は 3 時に家路に就いた。何故なら踊りは満員で、410 人もの仮装者がいたからである。」

1776 年 2 月 18 日(日)には：「仮装舞踏会（auf die Redute）へ。一行は貴婦人に扮した厩舎長官（Obriststallmeister）、侍従（Hofmarschal）〔ニコラウス・ゼバスチアーン・ロードウロン伯爵〕が騎士（Cavalier）役、〔ポリカーブ・フォン・〕リリエン男爵が情夫（Cicisbeo）役、〔ヨハン・ネーボムク・〕ヴィッカ伯爵が徒歩伝令（Laufer）役、リリエン男爵の同僚のシュミット氏が理髪師（Friseur）役、父親の〔レーオポルト・〕モーツァルトが門番（Portier）役、息子〔ヴォルフガング〕が理髪師の息子（Friseur bub）役、〔ヴォルフ・ヨーゼフ・〕イーバラッカー伯爵がムア人（Mohr）役、そして私が召使（Bedienten）役であった。仮装舞踏会（auf die Redute）には馬車で行く；その他仮装については 9 ペアから構成された主役の神々のメンバーが目引いた、〔ヨハン・ルードルフ・〕**チェルニー伯爵**、〔フランツ・クリストフ・フォン・〕レールバッハ男爵、〔ジギスムント・フォン・〕エンツェンベルク男爵、2 人の男爵シャフメンネルン〔バルタザール及びジークムント・フォン・シャッフマン〕〔ヨハン・ネーボムク・フォン・〕トラウトマンストルフ伯爵、カンパーニャ男爵、ド・ヴァルター氏、そしてジーゲツ

ル・〔=ジークムント・〕ロードゥローン伯爵、それからリッツァ伯爵夫人〔=マリア・アントーニア・フォン・リュッツォウ〕、シャルロッテ〔=マリア・カロリーナ・フォン〕・ロードゥローン、ヨゼーファ、アントーニア及びテレゼ・バリザーニ、ルイーゼ・ド・ロービニヒ、〔マリア・アンナ・〕ド・フロミラー嬢、フランソワーズ・ド・レーリング男爵夫人、そして〔テレゼ・〕ド・キルジンガー夫人；彼らは前座を演じ、それからコントルダンスを踊った。今日は全部で420人であった。私は明け方4時まで留まった。」

1776年9月26日(木)には：「早朝6時に我々4人はヘーゲル邸を出て8時にここ〔自宅〕に着く。午前中ロービニヒと会った。バリザーニのところとモーツァルトのところに行った。そして昼食。午後にはザウアーヴァインのところに行きコーヒーを飲む。アマンも同席。そして帰宅。午後4時にはコントルダンスのリハーサルに行く。7時まで続いた。取りまとはチェルニーン伯爵。全部で24人の参加者。2組の「神様のペア」がチェルニーン伯爵と〔マリア・テレジア・ヨゼーファ・〕シェーンボルン伯爵令嬢<sup>注10</sup>。そして〔フランツ・クリストフ・フォン・〕レールバッハ男爵とヴァリス伯爵夫人。そして8組の「森の神様のペア」が〔ヨハン・ネーポムク・フォン・〕トラウトマンストルフ伯爵と〔テレゼ・〕フォン・キルジンガー嬢；〔ジギスムント・フォン・〕エンツェンベルク男爵とルイーゼ・ロービニヒ嬢；アルタン伯爵とヨゼーファ・フォン・バリザーニ嬢；〔フランツ・パウル・〕カンパーニ伯とアントイン〔=マリア・アントーニア・フォン〕・バリザーニ；ジークムント・ロードゥローン伯爵とシャルロッテ〔=マリア・カロリーナ〕・ロードゥローン伯爵夫人；シャーフマン男爵〔ことバルタザールあるいはジークムント・フォン・シャーフマン〕と〔マリア・アンナ・〕フロミラー嬢；シェルフェンベルク男爵と〔フランツィスカ・〕フォン・レーリング嬢；ジークムント・フォン・ロービニヒとテレゼ・バリザーニ。そして4人の「森の男」が〔ゲオルク・フォン・〕パッピウス、〔フランツ・フォン・〕メルク宮廷顧問官、ゲッコ〔=フランチェスコ〕・バリザーニそして私。我々は全員が持ち衣装(Quarderobbe [=Garderobe])を着用するが、亜麻布製の間に合わせ物である。そして、8人の使用人がまだ馬車にいるうちに、全部の音楽を踊るこの衣装に〔着替えた〕〔中略〕コントルダンスのあとは帰宅し、外出せず。劇場では喜劇《イギリス人賭博師( Il Giocatore Inglese )》が上演されている。今日はとても強くて不健康なシロッコが来ており気温が高くなっている。あたかも今年の7月がそうだったように。」とあり、チェルニーンの世界好きぶりがしのばれる。

1777年1月25日(土)には：「早朝私は馬術学校(Reitschul)に行った。そこで私は〔ヨハン・ルードルフ・〕チェルニーン伯爵を探し出し、仮装について話をした。〔中略〕午後ロレート教会に行き、そしてコレギウム・ヴィルギリアヌム(Collegium Virgilianum)の侍童(Pagen)のところで私たちは来るべき行進の仮装を試し、練習(Exercitium)をした。」

1777年2月1日(土)には：「午後、自宅。そのあとロレート教会に行き、それから〔ジルヴェスター・フォン・〕バリザーニを訪ねるが、みんな不在。みんなリッツァウ〔ヨハン・ゴットフリート・リュッツォウ〕のところでコントルダンスの練習をしていたためである。そのあとモーツァルト家を訪ねるが、母堂と娘さんに会っただけ。娘さんが言うには、謝肉祭の月曜日に『アポロとミュージシャンたち』というバレエが上演され、〔ヨハン・ルードルフ・〕チェルニーン伯爵、それにアウエルスベルク伯爵夫人、フォミラー〔マリア・アンナ・フロミラー？〕、バリザーニ家の4人、ロービニヒ、メルク、それにモーツァルトが参加するとのことだ。」

1777年2月2日(日)付けシーデンホーフエンの日誌には：「夕方食事にギロウスキのところに行った。そして彼とルイーゼと一緒にシュタートジンドイクスのところに行った。それから仮装舞踏会へ。全180人の仮装者がいた。そこにはまたバリザーニの家族、ダウヴァヴァイクの家族等々がいた。そして3時過ぎに家路に就いた。NB：今日仮装舞踏会にて知ったが、父親の〔プロコプ・アーダルベルト・〕チェルニーン伯爵が亡くなった。このような喪の場合には息子の〔ヨハン・ルードルフ・〕チェルニーン伯爵と〔マリア・アントーニア・〕リッツォウ伯爵夫人のために謝肉祭及び大コントルダンスは取り止めとなる<sup>注11</sup>。」

モーツァルトがマンハイムに発った後の1777年10月5日(日)には：「9時に私たち4人は一緒に仮装舞踏会(auf die Redute)に出掛けた。この会は〔フランツ・クサヴァー・〕プライナー侯爵、〔フランツ・ヨーゼフ・〕ヴィンディッシュ・グラーツ伯爵、〔ヨハン・ルードルフ・〕チェルニーン〔伯爵〕、そして〔ヨ・ゼフ・〕シュターレンベルク〔伯爵〕が提供した。500人の仮装者。私はほぼ15のメヌエットと3つのコントルダンスを踊った。後者は〔マリア・アンナ・〕ダウヴァヴァイク嬢とであった<sup>注12</sup>。私たちはおおむね黒尽くめであった。私は黒仮面服(Domino)を新調していた。〔欄外に〕私たちは5時まで留まった。」

1778年3月2日(月)には：「夕方仮装舞踏会(auf die Redute)で240人の仮装者。そこでは特に〔ヨハン・ルードルフ・〕チェルニーン伯爵が上演したパントマイムが承認を得た。私たちは1時半までいた。」

##### 5. モーツァルトが故郷を去った後、アマチュアオーケストラを結成したチェルニーン

レーオポルトの語るチェルニーン姉弟の行状を見ていこう。1778年4月12日、ザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子への手紙：「チェルニーン伯爵様は宮廷で下手なヴァイオ

リンを弾くだけじゃ満足できず、指揮もやりたがっています。それだからこそ、あの方はもう愛好家の楽団を創設したのですが、これはロードゥローン伯爵の広間(ロードゥローンのプリモゲニトゥールパレス)で、毎日曜日の3時過ぎにコンサートを始めるはずです。ジーゲッル・ロードゥローン伯爵が私たちを訪ねてきて、ナンネルに(愛好家として)クラヴィーアを弾いてくれと勧めています。ところがこの私には、第2ヴァイオリンをうまくまとめてくれと、しきりと頼んできました。一週間前の今月の5日には、そんなわけで最初の奏楽がありました。そのときはチェルニーン伯爵が第1ヴァイオリン、それにパピウス男爵、ロードゥローン家のジーゲッル、若い方のヴァイローター、コルプ、ノンベルクからきたコルプの弟子、それにまだ私の知らない若い学生が二、三人いました。第2ヴァイオリンには、私とロービニツヒ家のジーゲッル、グセツティ、アルトハーン伯爵、カイエターン、アントレッター、学生が一人に、チェッカレリが第2ヴァイオリンの殿でした。ヴィオラ二人は、元イエズス会士のプリンガーにヴィースホーファーです。オーボエ二人は、従僕のヴェーバーと、リンツの芝居で役者をしていたシュルツという男の息子です。鐘楼吹奏手が二人、ホルンを吹きます。ヴィオローネはカッセルとヴォルフフェック伯爵だが、ときおりはランフトゥルもやります。チェロ。これは新任の若い大聖堂参事会員のツァイル伯爵にシュパウアー伯爵、宮中顧問官のメルク、アントレッター家のジーゲッル、そしてランフトゥルです。ナンネルは全部のシンフォニーを伴奏したし、チェッカレリが愛好家演奏会の幕開けに[イタリア語]アリアを一曲歌ったので、あの子は彼の伴奏もしました。シンフォニーのあと、チェルニーン伯爵が、ブルネッティ風に綺麗に作られたジルメンの協奏曲を弾きました。またそのあと、別のシンフォニーのあとで[イタリア語]アルトハーン伯爵がすさまじい三重奏曲を一つ弾きましたが、これは引掻いたのか弾いたのか、だれひとり言えないでしょう。これは4分の3拍子なのか、偶数拍子なのか、それともいままでまだ知られていない拍子を新しく発明したものなのか、だれも言えません。ナンネルも協奏曲を一曲弾くはずでした。ところが、伯爵夫人が自分の素晴らしいフリーゲル(これは教皇用の保留品です)を持ち出してこないで、脚を金色に塗ったエーゲダッハーのフリーゲルしかそこにはなかったもので、あの子は弾きませんでした。結局は、ロードゥローン家の二人のお嬢さんが弾かざるをえませんでした。お二人には弾いてくれとの依頼は前もってなかったのですが、私が先生になってからというもの、いつでもなにか弾くことができるからで、お二人ともこの私に面目をほどこしてくださいました。」

1778年4月13日、ザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子への手紙：「枝の主日の12日には、二度目の愛好家音楽会がありました。最初の会でも、二度目の会でもシュターミッツのシンフォニーが演奏されましたが、とても評判でした。というのも、これらの曲はひどくやかましいからです。パピウス男爵はとてもやさしいヴァイオリン協奏曲を弾きました。少なくともテンポは正常で、けつして贗物じゃありません。かれはピンツガーのところで勉強しています。

でも、そのあとコルプさんがおまえのカッサシオン[ディヴェルティメント 変口長調 K.287(271H)と考えられる]を弾いて、びっくりするくらいの喝采を得ました。チェルニーン伯爵はコルプのヴァイオリンをいままでいちども聴いたことがなかったし、このカッサシオンを聴いたこともなかったのですが、うしろに立ったり、またやがてはものすごく注意深く彼の横に立ったりして、彼のために譜めくりをしていました。この方は曲をびっくりするくらい賞めちぎり、それがおまえのものだと聞いて、三度も四度も、熱心に私におっしゃったものでした。

『それじゃ、この曲をあのお男はいつ作ったのだ？ 私は当地にいなかったにちがいない。』それに曲についても演奏についても、いささか顔を真っ赤にし、また声まで震わせて、自分の驚きを表明するのやめることができませんでした。一同、まったくしーんとなって聴き入り、一曲ごとに、ヴォルフフェック伯爵、ツァイル伯爵、シュパウアー伯爵、それにみんなが、『ブラヴォー、マエーstro、ブラヴォー、コルプさん！』。ロードゥローン伯爵夫人、リュッツォウ伯爵夫人、その他みなさんがじっと聴き入り、満足しておられたが、伯爵夫人は、おまえがあのかたの前でしょっちゅう弾かされた変奏曲のところではじめて、これが自分のための曲だと気がつき、すっかりよこんで私のところに走って来られ、そのことを私にお話しになりました。私は第2ヴァイオリンを弾いていたからで、コルプの生徒がヴィオラ、カッセルがバス、コルプのところでもうしょっちゅう吹いていた二人の鐘楼吹奏手がヴァルトホルンでした。音楽会は、クレツルのところの二人のお嬢さんがクラヴィーアでまことにみじめに締めくくったが、姉さんのほうはなんとも言いようがないくらい下手で、やりきれるものではありませんでした。まったく我慢できないもので、彼女たちがキューンブルク邸の芝居で歌ったときよりもっとまずいものでした。」

## 6. 作曲もしたが粗忽者とも言われたヨハン・ルードルフ・チェルニーン

モーツァルトがザルツブルクを去った後に誰が市民の霊名祝日などの祝いに作曲したかについて、1778年6月11日付けザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子への手紙で明らかになる：「あさっては聖アントニオの祝日で、おまえはもういないのです！誰が伯爵夫人のために夜曲を一曲作るのだろう？ 誰が？ 愛好家団体です、チェルニーン伯爵とコルプの二人がトップのヴァイオリンですが、びっくりするようなソロがあります。曲は ハーフェネ

ーダーのアレグロにアダージョ、**チェルニーン**のメヌエットと三つのトリオですが、すべて新しく作曲されたものです。行進曲はハーフェネーダー<sup>注13</sup>のもですが、これもすべて駄作で、盗作で、まったくの目茶苦茶物です！でたらめで　まるでこの世と同じです。」このようにチェルニーンは作曲もしている。

1778年6月29日、ザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子への手紙：「私はおまえたちに6月11日付けで**チェルニーン**の夜曲について手紙を書きました。この曲は憐れむべくも滑稽で馬鹿げた結末を見ました。**チェルニーン**は同じ晩に、ロードウローン伯爵夫人にも、また[自分の]お姉さんにも演奏しようとしてしました。まず最初の馬鹿な行ないは次のようなことでした。彼は夜曲を、まず最初にお姉さんのためにやり、そのあとでやっとロードウローン伯爵夫人のところに行ったのでした。[馬鹿な行ない]というのは元帥夫人(Landmarschallin)は城砦連隊長夫人(Schlossoberstin)よりずっと上位であるばかりか、**リュッツォウ伯爵夫人**はまた[彼の]お姉さんとして、その生まれつきの謙虚さから他所の貴婦人にこの榮譽をよるこんでゆだねもしただろうからです。二番目の馬鹿げた行ないは、しかし、もっと合点がいかないものでした。奏楽はロードウローン夫人のところでも始まりました。**チェルニーン**は窓を見上げて、それから叫びました。『続けなさい。』つづいてメヌエットとトリオがきました。たった一度きりでした。それからアダージョです。これを彼はまったく一生懸命に、ものすごく下手に演奏しました。彼のうしろに立っているブルネッティにずっと話しかけ、声高に『続けて』と叫びました。それから『出発！進め！』そして楽隊と一緒にまたたく間に立ち去りました。まるで誰かが誰かに夜曲によって、公衆の面前で安静妨害のデモンストレーションでもしようとするときにやられるかのようでした。町の住民の半分もの人たちが立ち会っていたのですから。で、なぜだろうか？　つまり、彼は伯爵夫人が窓辺にいないものと思い込んでいたのです。こうした彼の思い込みをいっそう強固にしたのはブルネッティでした。ところが、伯爵夫人は司教座聖堂参事会首席(Domdechant)のプライナー侯と一緒に窓辺にいらっしやったのでしたし、ほかの皆から見られていたのです。それから二、三日して伯爵夫人が会合にいらっしやったとき、この方はブルネッティをこっぴどく叱り付けられました。このとき以来、大司教はもう何も彼とは話をしません。彼は(長いこと協奏曲を弾いていないあとなので)今それで、もっと巧みに取り入ろうとしています。ただ誰も彼の演奏には注意を払いませんでした。それにハーフェネーダーが弾くと、みんなが『ブラヴォー』と叫びました。運命の輪はみんなこんな具合に回るのです！」

モーツァルトもこれを受けて1778年7月9日パリからザルツブルクの父宛に：「ロードウローン伯爵夫人はもうあのような音楽会を望まないと思います。**チェルニーン**はまさに若輩の粗忽者(Schußbartl)だし、ブルネッティはがさつなやつです」と述べている。ここでモーツァルトの**チェルニーン**に対する評価が重要な意味を持つので解説しておこう。父レーオポルトに従順な同意を表明する文脈でのSchußbartlという言い方は、まさにレーオポルトが10日前の手紙の中で別人に対して使った言い方そのものであって、モーツァルトは無意識のうちに(父親の呪縛に囚われてしまって)その言葉で返事を書いている。そのSchußbartlは書簡全集の注によれば“性急で軽率な行動をとる人”であるが、当時の辞書等の文例<sup>注14</sup>からは“礼儀知らず”を戒める意味も込められている。従って書簡全集の2つの訳語の内“青二才”でなく“粗忽者”の方を採るべきであろう。“礼儀知らずで、行動や振る舞いも性急で軽率な**チェルニーン**”のイメージは悲しいかなこのようにしてレーオポルトとヴォルフガングによってモーツァルト研究者間に定着してしまった。とは言え、1777年12月4日、ザルツブルクのレーオポルトからマンハイムの息子宛の手紙で見る限り礼儀は弁えていた人のようであるのだが：「**チェルニーン**伯爵様がおまえによろしく言ってほしいとのことでした」。

## 7. 父伯爵プロコプ・アーダルベルト・チェルニーンのための作曲への考察

さかのぼって1776年12月13日にザルツブルク在住の皇王室軍の中佐であったカール・ルートヴィヒ・フォン・ペーターマン男爵<sup>注15</sup>がヤン・ルードルフの父伯爵プロコプ・アーダルベルトに宛ててプラハに送付した手紙(フランス語)を紹介しよう<sup>注16</sup>：「閣下から賜る全幅のご信頼のもとで私が使命を果たし、ご満足頂くことができれば幸せの極みであると常に思料するところであります。従いまして、私はプティ・モザールに20ドゥカット[90フローリン]の年間支払いについて申し伝えました。彼は全く閣下の思召しに従うと申しております。このことに関しましては閣下のご指示をお待ちする次第です。彼はまた交響曲及びその他の作品を可能な限り迅速にお送りするつもりであると私に申し述べました」。

この手紙はいくつかのことを推測させてくれる。まず、父伯爵がモーツァルトに作品供給の年間契約の意志を持っていたということであり、それが初めてこの時点でモーツァルトに伝えられたということである。逆にこれ以前にはそのような意志は表明されていなかったということである。また、手紙ではこの時点ではまだ注文指示が出ていないことが分かる。しかも確かに支払われたのかどうかはこれだけでは分からない。その点に関しモーツァルトは1780年12月19日のレーオポルト宛の手紙で次のように述べている：「ぼくが願うのは、もし**チェルニーン**の父親のような立派な紳士を二人も持てたらということです。それは毎年ちょっとした助けにはなるでしょう　でも、年に100フローリン以下ではだめです。　しかもその場合、どんな音楽

を好むかと言うことです。契約額が近いことから支払いが一度はなされたことは確実であろうと思われる。

しかし、この支払いが作品だけに対するものだったのか、チェルニーの息子へのレッスンに対するものも含まれていたのかははっきりしないとT・ヴォレクとI・ビットナーは指摘している<sup>注17</sup>。あるいはレッスンだけに絞られてしまったという可能性もある。しかし、チェルニー父伯爵は1777年1月30日に亡くなってしまったため2度とそのようなチャンスは訪れなかった。

## 8. コントラダンス K.269b の従来説

新全集の序文でエルヴァースは、前述のカール・フォン・ペーターマン男爵のチェルニー父伯爵宛の手紙とシーデンホーフェンの日誌を引き合いに出すことによってコントラダンス K.269b の成立事情を次のように考えている：「プロコプ・アーダルベルト・チェルニー伯は、1776年の末、モーツァルトに年金を与え、彼の楽団のために作品を書いてもらう契約をした。したがってこの契約を果たすために、モーツァルトが1777年1月に舞曲を書いたと考えられる。また、2月の初めに上記チェルニー伯の子息ヤン・ルードルフ・チェルニーによりザルツブルクのカーニヴァルでこの作品の演奏が行われることになっていたが、1777年1月31日に父伯が急死したことで中止されたとも推測できる。このために《ヤン・ルードルフ・チェルニー伯爵のためのコントラダンス》K.269b と呼ばれるとされる。

しかし、エルヴァースの推測は楽観的に過ぎるように思われる。M・ハイドンの筆跡、1775年のヴァイオリン協奏曲への引用など幾つもの反証をあげることができる。

またハインツ・シューラー<sup>注18</sup>は「おそらくは1787年秋のプラハ旅行の折に、伯爵の城館ノイハウスで書いたものと推定する」というが、クラヴィア譜をチェルニーへ手渡したタイミングを言っているとしても遅すぎる。

## 9. ヴァイオリン協奏曲連作 (K.216~219) がチェルニーのために作曲されたとする説

モーツァルトのヴァイオリン協奏曲は1曲のみレーオポルトの1778年8月3日付け手紙で「コルプ用のおまへの協奏曲が演奏されました」という記述から1曲はコルプのために作曲されたことが分かっている<sup>注19</sup>。それ以外のヴァイオリン協奏曲は誰のために作曲されたのか分かっていないが、ヤン・ルードルフ・チェルニーのために作曲されたのではないかということも当然議論される。実際には誰のために作曲したかということを追及するより、協奏曲であるから誰によって演奏されたのかの実態を調査することである程度は作曲の目的が分かるであろう。弾かれるチャンスはモーツァルト自身を含め以下のように豊富にあったようである。

1777年7月25日、シーデンホーフェンの日誌から「〔午前〕グセッティのところを訪ねた。そこで、晩に息子のモーツァルトが姉さんのために演奏しようとしていた曲の演奏があった。これはシンフォニアとヴァイオリン協奏曲から成っていたが、協奏曲のほうは息子のモーツァルトが弾いた。それにフルート協奏曲。これはコントラバス奏者のカッセルが吹いたが、すべて息子のモーツァルトの作だった。」

1777年8月15日、シーデンホーフェンの日誌から：「午後、彼女〔ダウヴラーヴァイク嬢〕とその父上と、モーツァルト家の音楽会に行くが、商人のヴァイザーの孫でプラハの名高いクラヴィア奏者のトゥーシェク氏と結婚したトゥーシェク夫人が歌い手として聴かせてくれた。声はとても澄んでいて心地よく、自分のスタイルがあって、たいへん愛らしく歌った。コルプ氏はヴァイオリン協奏曲を1曲弾いたが、音がすばらしく、とても力強く、スピードもあったが、ただときおりいくらか音を外していた。モーツァルト君とモーツァルト嬢は1台のハーブシコードを一緒に弾いた。11時半に帰宅。」

1777年9月28日、ザルツブルクのレーオポルトからミュンヘンの息子への手紙：「この金曜日には、コルプさんが他所から来た商人たちのために、大がかりな音楽会をやったが、フェルレンディ、フェッラーリ、カッセル、シュタードラー、ピンツガーたちも居合わせていた。彼はおまへの協奏曲のヴァイオリン・ソロを弾いたし、夜曲も弾いたが、曲がとても評判がよくて、びっくりするくらい大騒ぎで拍手がすごかったので、もう当地にはいない善き友人の曲だと紹介があった。するとみんなが叫んだものだった。『私たちが彼を失ってしまったのは残念だ！』これはアイツェンベルガー館で催されたものだった。」

しかし一方、チェルニーがモーツァルトのヴァイオリン協奏曲を弾いたという言及はなく、別の作曲家のものしか弾いてない。既出の1778年4月12日、ザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子への手紙で：「一週間前の今月の5日には、そんなわけで最初の奏楽がありました。〔中略〕シンフォニーのあと、チェルニー伯爵が、ブルネッティ風に綺麗に作られたジルメンの協奏曲を弾きました。」

ヴァイオリン協奏曲連作 (K.216~219) がチェルニーのために作曲されたとする説は考えにくい。老チェルニーの依頼により作曲したという仮定も3曲の作曲年が1775年であることから矛盾する。

リュッツォウ伯爵夫人のクラヴィアの腕前についても1778年6月11日付けザルツブルク

のレーオポルトからパリの妻、息子への手紙を引用しておこう：「ロードウローン家の広間での愛好家コンサートは、まだ日曜日ごとに続けられています。[中略]フォン・リュッツォウ伯爵夫人はもう長いこと、自分用に、ヴォルフガングの協奏曲を写譜させていましたが、この曲を彼女に教えたのはシュピッツェーダーでした。彼女はこの曲を弾いてみようと考えたので、自分の部屋でヴァイオリンをつけて練習してみました。そのときプリンガーさんも立ち会っていました。下手くそな演奏だったとみんなが彼女に言いましたし、彼女自身もそれがわかりました。そのあと、彼女は私たちのところに泣きながらやってきて、教えてくれと頼み、演奏を2週間延期し、よく勉強したので、大変な面目をほどこしました。」これにより、一般に言われているリュッツォウ伯爵夫人がレーオポルトの弟子であったという説は不正確な事実認識に基づいていることが分かる（この臨時の特訓を指して弟子であったとは言えないからである）。

## 10. ヴィーンにおけるヨハン・ルードルフ・チェルニーン伯爵

1778年6月11日、ザルツブルクのレーオポルトからパリの妻、息子へ宛てて「チェルニーン伯爵が去れば、ブルネッティも同様おさらばです！」という手紙の文句がある。書簡全集はチェルニーン伯爵がブルネッティの私生児事件を庇っていたものと思われると注記しているが、この頃チェルニーンが大学を卒業しザルツブルクを去ったことも分かる。行き先はヴィーンであった。

伯爵は1781年10月22日、皇王室マリーア・テレージア・フォン・シェーンボルン邸出身の星十字勲章受勲の貴婦人である若い伯爵夫人[マリーア・テレージア]を芸術的才能を持った生涯のパートナーとして選んだ[既にザルツブルクにてカップルで踊っていたのは見てきたとおり]彼女は音楽、絵画に熱意を持っていただけでなく芸術家としての一歩を踏み出していた。彼女は1758年6月7日シェーンボルン=プーフハイム及びヴォルフスタールのオイゲン・フランツ・エルヴィン帝国伯の娘として生まれた。彼女の母は大司教の妹の一人旧姓マリーア・テレージア・フォン・コロレード伯爵夫人であり<sup>注4</sup>、大司教と訣別したモーツァルトを後々までも問い糺して煙たがられた御仁である（書簡全集1781年11月17日参照）。

この結婚の2日後のモーツァルトからレーオポルト宛の手紙には妙なことが書かれている。「いま、長く手紙を書いてもらえません。これからまだアウクスブルクの従妹とシュタイン氏に手紙を書かなければならないので、チェルニーン伯爵から、夫人のためにピアノフォルテを注文するように頼まれたからです。ところで、チェルニーン伯爵が…であることをご存知ですか？…であればいいのですが。僕は…したくありません。」これは1781年11月17日の手紙によれば「チェルニーンが足げく通っていた家でメルクは墮落した」という文面と関係があると言われている。これは「粗忽者」では済まされぬ振舞いではある。

1783年5月28日ナンネルの日記帳によれば「午後、チェルニーン伯爵が夫人と連れ立って当地に到着」した。モーツァルトはもちろんヴィーンにいるため不在である<sup>注20</sup>。

1784年3月20日、ヴィーンのモーツァルトからザルツブルクのレーオポルトへの手紙ではチェルニーン伯爵がモーツァルトの予約会員になっていることを報告している。

シューラーは、1787年秋にモーツァルトの第2回プラハ旅行時にノイハウス宮殿（インドウジフーフ・フラデツ）で再会も果たしたという[しかしこれには根拠が書かれていない。K.269bをこの時に作曲したという仮定を根拠としているのなら断言は慎むべきであろう]一方、1791年のプラハ戴冠式日誌は、フラチャニーのチェルニーン宮殿に於ける大コンサートを報告しており、広範囲なプログラムにはコジェルフがこの時のために作曲した合唱曲ほかが含まれているが、モーツァルトの作品については記載がない<sup>注21</sup>。

## 11. ヴィーンにおけるその後のチェルニーン

チェルニーンは父親からかなりの量ではあるものの、中身はかなり壊滅的状態の遺産を受け取っていたが、青年のエネルギーを注ぎ込んで彼はすぐここに矯正策を施した。適切な領地管理と模範的指示は収入を増やし、半ば荒れ果てた宮殿はやがて美しい敷地や馬の飼育場へと変わりボヘミアで最も優れたクラスにランクされ、結果として美しい敷地は素晴らしい庭園により特に有名になった。1800年頃から<sup>注2</sup>イタリア、スイス、フランス、ベルギー、オランダ、イギリスへ頻りに旅行をし、彼は多くの貴重で素晴らしい銅板画や絵画を集め、宮殿の素晴らしい設備をそれらで飾って完成させた。20年の短期間に彼はその収集を帝国一にまで持っていくことに成功した。絵画芸術部門を鑑賞した識者たちは1823年11月に彼を皇王室ウィーン絵画芸術アカデミーの会長に指名した（彼は1827年までオフィスを構えた）。1824年皇帝フランツ1世<sup>注2</sup>は彼を宮廷侍従[Oberstkämmerer]に1828年には副第一宮廷執事[Obersthofmeister]を兼務で任命した（皇帝は1834年に再びその地位の付与を解いた）。人文主義的な方向や目覚ましい活動に目を向けたチェルニーンは多数の大学と福祉施設の創設者であり、またスポンサーでありメンバーでもあった。皇宮廷侍従職の長としての彼の下には王室自然史コレクション、宮廷芸術コレクション、絵画ギャラリー、宮殿管理、皇王室官房芸術家そして皇王室宮廷劇場があった<sup>注22</sup>。シェーンブルンの植物園、そして彼と有名な劇作家シュライフォークの管理下で皇王室宮廷劇場が達成した芸術的高さ、この二つは彼の芸術センスと精力的な活動の賜物である。皇帝もまた

そのような成果を認め：1823 年にチェルニーは金羊毛勲章の騎士となり、1 年後には枢密皇帝顧問官 [ Geheime Ratswürde ] の座を得た。同時期の多数の要職は、彼の特別な個性の積極的な側面を強調する<sup>注 4</sup>。モーツァルト時代とは人が変わったような評価を受けたものである。

チェルニー夫妻は金婚式を祝い、伯爵夫人は 1838 年 2 月 23 日に、夫は 1845 年 4 月 23 日にウィーンで亡くなった<sup>注 4</sup>。



ヨハン・ルードルフ・チェルニー伯爵  
(F・リーダーによるリトグラフ)<sup>注 23</sup>



マリア・テレジア・チェルニー伯爵夫人  
(エリザベト＝ルイーズ・ヴィジェ＝ルブランによる)<sup>注 24</sup>

## 12. まとめ

ヴァイオリン協奏曲 K.207, 211, 216, 218, 219 の 5 曲は《ザルツブルク協奏曲》とも言われている。これを単に「ザルツブルクで作曲した」協奏曲ではなく、「ザルツブルクの仲間と自分のために作曲した」協奏曲というように理解したい。1775 年のモーツァルト (19 歳) はチェルニー (17 歳)、リュッツォウ伯爵夫人 (26 歳)、シーデンホーフエン (28 歳) とともに希望を持って作曲・演奏活動に熱中していたことが分かる。シーデンホーフエンの日記には構すべりの行事や卓上ゲームの数々が出てくる。ザルツブルクの生活とウィーン的生活の異同についても少ない情報から出来るだけ想像を逞しくして凝縮した情報へと組み直すことが出来る可能性がある。これからもさらに調査を進めていきたい。

注：

注 1：Dennis Pajot: "The Czernin Violin Concertos ???" < <http://www.mozartforum.com/Lore/article.php?id=112> >.

注 2：ザルツブルク大学サイト < [http://www.ubs.sbg.ac.at/ubnews/archiv/NL\\_02\\_2010.pdf](http://www.ubs.sbg.ac.at/ubnews/archiv/NL_02_2010.pdf) >.

注 3：Joachim Ferdinand von Schidenhofen Ein Freund der Mozarts, Die Tagebücher des Salzburg Hofrats (Herausgegeben und kommentiert von Hannelore und Rudolph Angermüller unter Mitarbeit von Günther G. Bauer), Verlag K. H. Bock, 2006. (Google Books ではスニペット表示サービスのみ)

注 4：Heinz Schuler: Mozarts Salzburger Freunde und Bekannte: Biographien und Kommentare, Florian Noetzel, 1998. (Google Books ではスニペット表示サービスのみ)

注 5：ハインツ・シューラーは「コロレドとモーツァルト家の間のよく知られている精神的不安定状況によるためらいが最初はおそらくあったと思われるが、若い伯爵もまた、ハンニバル広場の有名な音楽家家族と付き合い、そこでレーオポルトまたはヴォルフガング・モーツァルトの音楽的指導を受けた」と述べているがコロレドとの不和は後のことであり、また具体的音楽指導の記録も残っていないことからいささか正確性に書ける記述と言わざるを得ない。

注 6：マクシミリアン・フランツは 1756 年 12 月 8 日、マリア・テレジアと神聖ローマ皇帝フランツ 1 世の間に第 16 子 (末子) としてウィーンに生まれた。聖職者としての道を歩み、1780 年に叔父カール・アレクサンダーの後を嗣いでドイツ騎士団総長に、1784 年 4 月 15 日にはケルン大司教となり、ボンに居住した。ボンで 1770 年に生まれたベートーヴェンを宮廷楽団で雇用し、楽才を磨くべくなにかと便宜をはかるなどベートーヴェンを庇護した。「太っちょのマクシィ」と愛称された。モーツァルトが最初のウィーン旅行でマリア・テレジアより贈られた大礼服はこのマクシミリアン・フランツ用の大礼服であった。

注 7：この日記及びモーツァルト父子の手紙の翻訳は、海老澤敏・高橋英郎編訳『モーツァルト書簡全集』全 6 巻、白水社、1976 年～2001 年による。なおチェルニーとツェルニーという表記の揺れはチェルニーに統一した。

注 8：Meine Tag Ordnungen: Nannerl Mozarts Tagebuchblätter 1775-1783, mit Eintragungen ihres Bruders Wolfgang und ihres Vaters Leopold, Verlag K.H. Bock, 1998. (Google Books ではスニペット表示サービスのみ)

注 9：Ruth Halliwell: The Mozart family: four lives in a social context, Clarendon Press Oxford, 1998.

注 10：シェンボルン嬢はのちにチェルニーの妻となる。

注 11：謝肉祭の月曜日の『アポロとミュージズたち』というバレエは上演されるにいたらなかったが、謝肉祭及び大コンルダグスは開催されたようである。

注 12：ダウヴラーヴァイク嬢はのちにシーデンホーフエンの妻となる。

注 13：ヨーゼフ・ハーフェネーダーは宮廷楽団員。1777 年 10 月 16 日のモーツァルトの手紙によれば、モーツァルトはアウクスブルクでヴァイオリン奏者としてハーフェネーダーのトリオを弾いている。そのほかレーオポルトの手紙にはハーフェネーダーの作品が演奏されたとの記述が 2 回出てくる。

注 14：Beschreibung einer reise durch Deutschland und die Schweiz, im jahre 1781: Nebst bemerkungen uber gelehrsamkeit, industrie, religion und sitten, 第 11 巻, Friedrich Nicolai - 1785 - Austria による定義は Schußbartl: geschossen, unter dem Hute nicht richtig となっている。これは「礼儀に欠けた勢いのよい人」と訳



すべきであろう。何故ならここで unter dem Hute は直訳すると“帽子の下において”であるが礼儀心の象徴であり“帽子の下において正しくない”とは“礼儀知らず”のことである。以下の例文を参照。“Er hat Schwalben unter dem Hute. = Er nimmt weder grüßend noch dankend seine Kopfbedeckung ab.”が“彼は帽子の下にツバメを持つ＝彼にはお礼の心も感謝の心もない”。“Das Lesestück erzählt uns, wie es kommt, dass man von einem, der nicht grüßt, wenn er grüßen fall, sagt, er habe Spatzen unter dem Hute. Sei höflich! Mit dem Hute in der Hand kommt man durch das ganze Land.”が“読本は次のように教えている、挨拶をしない人の前で挨拶をした場合こう言いなさい。彼は帽子の下にスズメを持っていると。礼儀正しくしなさい。人は手に帽子を持って世の中を渡るのです”。

注 15：1716 年頃生まれの皇王室軍中佐 (Oberstleutnant) カール・ルートヴィヒ・フォン・ペーターマン男爵はハルスベルガー [ のザルツブルク・クロニク ] によれば“非常に愛想のよい男”であり、ウィーンのコロレド家と近い関係にあった。大司教ヒェロニムスに従ってザルツブルクに来た彼は時に応じてホーフ宮廷マイスター執事として、教師として、若いルドルフ・フォン・チェルニーン伯爵の勉強のアドバイザーとして働いた。彼は大司教から信頼される友人と見なされザルツブルクに留まったが、そこで 1807 年 2 月 8 日に 91 歳の高齢で亡くなった (以上注 4 による。既出のシーデンホーフフェンはペーターマン男爵を少佐=Le Major としている)。一般に役職については文献間で異同が多い。また和訳もまちまちである。

注 16：Die Dokumente Seines Lebens, S. 141.

注 17：The Mozartiana of Czech and Moravian Archives (Prague: Archives Department of the Czech Ministry of the Interior, 1991), 5 and 18 - 19. 本稿では注 9 のハリウエルの著書から引用した。

注 18：書簡全集 V, p.480, n.108.及び Mitteilungen der Internatiolen Stiftung Mozarteum, 38 Jahrgang, Heft 1 - 4, Salzburg, Juli 1990, S.10.

注 19：カール・ベアは K.271a(271i)がこの曲であるとしている。神戸モーツァルト研究会 第 219 回例会参照。

< <http://www.hi-net.zaq.ne.jp/buasg502/218.pdf> >. 筆者は K.207 ではないかと考えている。

注 20：シュラーは注 4 の著書で、「モーツァルトの手紙にしばしば言及されているように、卓越した音楽通として知られ、幾分頑固なところがあるものの人間的に素敵な伯爵夫人は若いモーツァルトに与えるにふさわしい印象をもたらしたにちがいない。受け取られた手紙の文面から確信を持って推定できるのだが、おそらく彼らの時々のザルツブルグ訪問の折、ハンニバル広場の家でも、彼女は同様に振舞った。彼らのためにも大司教との訣別をモーツァルトは後悔した。」と述べているが、手紙に登場するのは記述の 1 回を例外として専ら母の方であり、娘夫婦のザルツブルグ訪問は記述の 1 回しか知られていないことなどから、母娘を取り違えていることが明らかである上に推定を加えているため混乱してしまっている。

注 21：シュラーは注 4 の著書でさらに「公式戴冠式オペラ《皇帝ティートの慈悲》の作曲家モーツァルトは既に病氣であり、参加者の一人であったかどうかは分かっていない」と述べているが、レーオポルト 2 世のボヘミア王戴冠式は 1791 年 9 月でありその時点でモーツァルトはまだ病氣ではなかった。

注 22：ブルク劇場の監督としてのチェルニーンは駆け出しのフランツ・グリルパルツァーを採用し、またヴァイオリン・ヴィルトゥオーゾのニコロ・パガニーニのコンサートを企画して入場料を下げた (注 2 による)。

注 23：チェルニーンのリトグラフ。

< [http://www.museum-aktuell.de/index.php?site=wissenschaftler\\_2&step=2&BG=10](http://www.museum-aktuell.de/index.php?site=wissenschaftler_2&step=2&BG=10) >.

注 24：Louise Élisabeth Vigée Le Brun (Marie Élisabeth Louise; 16 April 1755 - 30 March 1842)による『マリア・テレジア・チェルニーン 1793 年』。セント・ペテルスブルク蔵。

< <http://www.liveinternet.ru/users/mikulishna/post121437204/> >

## 付録：

チェルニーンが収集した絵画は 350 点にも及ぶという。その中でも特別クラス作品介绍する。

### 1. ヨハネス・フェルメール『絵画芸術』1666-1667 年頃制作

この絵は 18 世紀には美術愛好家の Gerard van Swieten 男爵(1700-1772)のもとにあった可能性が高い。男爵は女帝マリア・テレジアの帝室図書館長官であった。18 世紀の末にはその子の Gottfried van Swieten 男爵(1733-1803)のもとにあった。彼はブラッセル、パリ、ワルシャワ、ベルリン大使を歴任し、その後父の死後 5 年間空白であった帝室図書館長官に就任した。日曜演奏会を開催しバッハ、ヘンデルを紹介、モーツァルトにヘンデルの曲の編曲を依頼もした人物である。1813 年にチェルニーンがこの絵を 50 オーストリアグレンデンで購入し、公開している。当時は Pieter de Hooch の作品と考えられていた。フェルメールのサインは、トレ・ビュルガーが 1860 年に発見した。チェルニーンの死後である。



## 2. アルブレヒト・デューラー『聖職者の肖像』1519年制作

この絵は1778年にはPaul von Praunコレクションに含まれていた。アルブレヒト・デューラーの兄弟のエントレスからニュルンベルクの鍛冶屋のヴェンツィル・ヤムニツァーに渡っていたものである。1801年にチェルニーンの所有となった。1778年当時は絵の聖職者は早くにルーテル派に転じた聖アウグスティノ修道会の修道士Johann Dorschであると言われていた。しかし、彼は1528年にニュルンベルクの聖ヨハネの教区司祭になったため今日に至るまで多くの議論が交わされている。現在はスイスの革命家Huldrych Zwingliと言う説が有力である。



## 3. ティツィアーノ・ヴェチェッリオ『元首アンドレア・グリッティの肖像』1546-48年頃制作

Andrea Gritti (1455 - 1538)はヴェローナ近郊のバルドリーノで生まれた。若い頃からコンスタンティノープルに住み、買い付けた品物をヴェネツィアへ輸出していた。1499年、スパイ容疑で逮捕されたが、オスマン帝国高官の介入のおかげで死刑を逃れ、数年して釈放された。元首(ドージェ)に選出され(在任:1523年-1538年) 神聖ローマ帝国とフランスのどちらにも与せず、中立を保った。1537年、ヴェネツィアが領有しているケルキラ島(ギリシャ)を包囲しようとしていたスレイマン1世を止めることができず、共和国はオスマン帝国との全面戦争に突入した。絵はヴェンツェル・アロイス・カウニッツ(1774-1848)の所有であったが1820年3月13日に売りに出され、チェルニーンが購入した。



(2011年5月8日作成)